
なるようになれ*ミラクル*

ZARUSOBA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なるようになれ*ミラクル*

【Zコード】

Z7003D

【作者名】

ZARUSOBA

【あらすじ】

「なるようになれ」から一年……えつ？なるようになれって何ですかって？……えつと、一応この小説は続編なのです（涙）興味のある方は読んでみてください。極々平穩に暮らす主人公「鈴木修」ところがどういう理屈か再び異世界へ呼び出される。そしてそこで見たものは小さな少女の姿だった。

第一話 「承認」（前書き）

この小説は一応続編です。

えつ？ 前作知らない？ でも大丈夫。

そんな人でも大丈夫なように一応作っています。

でも前作読んでから読んで頂けるとより一層美味しく読んでいただけます。

どれくらい美味しいかと言うと、冷ご飯にふりかけかけたぐらい美味しいだけます！

第一話 「承認」

「」はとある星。名を「アリシューレード」この世界では魔族と人間が暮らしており、それだけでも変わっているが

特に変わったことがある。

『魔王』の存在だ。

なにかとやんちゃな魔族達を取り仕切るには魔王という存在が必要不可欠。

そしてこの時期、新たな魔王が誕生する。

暗い部屋の一室。

電気代を節約するためか、電気をつけずに机の上に置いてある紙を見つめる

少女の姿があつた。

「やつぱり、こいつで決定かなー」

あーあ、と仕方なさそうにその紙に貼つてある写真を眺める。

一人の男性。見た目は至つてごく普通の男だった。

少女は机の片隅に置いてあつた太鼓判を手に取る。

そして、紙めがけて思いつきりその判を叩きつけた。

少女は自分の押した判に満足がいったのか、口元が大きく三日月を作る。

「アンタに採用！ 名誉ある五二十八代魔王の名は『鈴木 修！』」

時期は春。

出会いがあり、そして別れがあるこの季節。予期せぬ出会いが訪れる事を

俺は密かに心待ちにしていた。

今年こそは春爛漫、甘い学園ライフを過ごしてやると決意していた。

俺、「鈴木 修」は高校二年生になった。

今日は初登校日。俺は自分の教室へと向かい、廊下に張り出された
いた

クラス表を目にする

「よつ！ 今年もヨロシクな。修

俺がクラス表を見る前に一緒にいたことが分かってしまった男が
一人。

俺はこの男の事をよく知っている。

小学校からの腐れ縁の「山本 和志」
自称サッカー部のエース。

「なんだよ、またお前と一緒にかよ……」

「そう嬉しそうな顔するなよ兄弟」

「いや、嬉しくないって」

そうして何時ものよつに漫才のような挨拶を交わし、教室へと入つ
ていく。

中は賑やかな事この上ない。

目の前の黒板には誰が何処に座るのか書かれていた。

俺と一志も所定の席へと座る。

そして遊びの時間から仕事の時間へと切り替わる鐘が教室に鳴り響く。

教室の中に担任が入ってくる。

頭はソフトクリームのような巻き髪に、二等辺三角形の眼鏡とゴーグークな女担任。

「えー、今日から私がこの教室の担任になった”山田 真希”ザマス。

皆さんヨロシクお願ひしますザマス」

そう担任が言つと、皆から心のこもつてない拍手が送られる。ぱち、ぱちと何処か投げやり。

しかし担任はさほど気にした様子は無く、構わず明日から日の日程を俺達に告げる。

二年になつたからには……などと一人演説を繰り広げるソフトクリーム。

そして最後に。

「皆さん、一年になつたからは就職か進学かはつきり決めておくザマス。

今からプリント渡しますから将来、何になつたいか希望を書いておいてザマス」

担任は席の一一番前の奴にプリントを渡し、前から後ろへと順々に配られしていく。

俺は手元に来たプリントに目を通すと、第一志望、第一志望、などと書かれていた。

(将来……か)

ふと頭をよぎったのが懐かしいあの頃。

異世界に呼ばれ、自分の夢が叶ったあの頃の思いで。
感傷に浸った為か、無性に会いたくなってきた。

俺は思わず第一志望にアリシュレードと書いていた。
無論、その後担任に呼び出されて「頭は大丈夫、ザマスか?」などと
言われたのは
言つまでもない。

学校初日が終り、いつもどおり帰る下駄箱を開けてみると、中
には

一枚の手紙が入っていた。
これって……もしかして！ 俺は焦る気持ちを抑えつつ、中身を確
認する。

「何々……」これは不幸の手紙です。この文面と一緒に物を十人に出
さないと
不幸が貴方に襲いかか……」

破り捨てた。

もう思いつきり音を立てながら。

俺は不愉快な気持ちで学校を後にする。

「ただいまー」

自宅の玄関のドアを開け、真っ先に向かうは一階にある自分の部屋。
ドタドタと階段を上り、ポイポイと学生服を脱ぐ。
俺は私服に着替え、一階の台所へと向かう。
今日は平日の為両親は働きに出ている。

棚にあるカップ麺を手に取り湯を注ぐ。

「いっただきまーす」

そうして食べようとした時　。

突如足元から虹色の光があふれ出す。それは円を描き、幾何学的な文字が浮かび上がる。

”ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ……”

何処からとも無く声が聞こえてくる。……”じょじょじょ”、おい。声からして女の子のようだが、姿が見えない。

呪文のような言葉は更に続く。

”　我、幾ばくの時を越え、真理を結び、門を繋ぎて鍵を解く!..”

「おいー、やつきの幼稚な呪文から続く言葉とは思えないぞ、それ！」

俺の言葉も虚しく、光は俺を包み込み、辺りが真っ白になる。

あまりの眩しさに目を閉じる。

それが数分続き、やがて光がおさまる。

奪われた視力が少しずつ回復していき、そして視界が開かれるとそこは自分の家ではなく、何処かの城と思われる室内が現れていた。俺はあまりに突然の出来事にキヨロキヨロと見渡している。

「お前が鈴木か？」

可愛らしくも高い声色がする方を向くと、目の前に手すりに肘をつ

いて足を組んで玉座に

ふんぞり返る少女がいた。

柔らかい桃色のツインテールに若干鋭い眼つき。口は一やりと笑い、少し尖った差し歯が見える。

服は黒の光沢ある衣装で、子供にはあまり似合わない衣装。そして一番目を引くものは……しつぽ。先っぽがトランプのスペードのように

なつており、それがフリフリと動く。

「よく来たな！ 人間の分際で」

「いや、勝手につれてこられたのですが？」

「ムツ、そうだった」

アハハハと目の前の少女は豪快に笑う。少し気になる言葉が。

「待った、今人間の分際つて言わなかつた？」

「ああ、言つた」

「じゃあ、君は人間じゃないのか？」

「おう。私は魔族だ」

「魔族……！」

その言葉を聞くやいなや途端に背筋が凍る。なにせあまりいい思い出が無いからだ。

俺は心の中で間違いであつてくれと思いながら質問する。

「あの、ここはどこのかな？」

「ん？ ここか？ ここはアリシゴーレー。お前の居るところは別の異世界だ」

ある程度予想はしていたが、実際に告げられると精神的にまいる。ハハツ、そうか。俺また帰つてきたんだ。

嬉しさ半分、悲しさ半分。

そういうえばどうして俺は呼ばれたんだろう？

「あの、俺を呼んだのは君なのか？」

「おう。いやー、しかし、お前がスズキか……なんかガツカリ」

「えつ？ どうして？」

「うむ、うちのジジイが何時も口癖で言つていた奴がこんな平凡の
人間だとはなー」

「じ、ジジイ？」

ジジイと言う言葉を聞いて頭に思い浮かぶものは一人。

以前俺をこの世界に呼び出したというはた迷惑な爺さんがいたな。
もしかして……。

「君、モンタ議長の血縁か何か？」

「正解。私はモンタジジイの孫娘にして現魔王エルナ様だ」

えっへんと威張るエルナという子供。

というか、こんな小さい子供が魔王だなんて……大丈夫か？ この
世界。

まあ、この世界がおかしいのは今に始まつたことじやないか。

「そういえば、おじいさんは元気？」

「うむ。元気に天に召されたぞ」

「ああ、そうなんだ。良かつ……て、ええつー？」

良くない、良くない！ 天に召されるって死んでるってことだよー？

この少女はなんら違和感なくそんな大それた事を話す。

普通しおりじくなるとか、悲しそうな表情するんじゃないの？

「ど、どうして？ 何で死んだの？ 寿命？」

「いやそれがなー、女風呂を覗こうと壇を登つているとおどぎックリ腰をやつたみたいで

そのまま落下。打ち所が悪かつたらしく天に叩かれた

「あ、そりなんだ」

モンタ議長らしいといえらしいな。

確かにそんな理由で死なれたら悲しみも半分以下だよな……。

「あのジジイのせいで魔王と魔王公平審議の会長もやるハメになつたわけよ？」

「……苦労してるね、君も」

「それでなー、魔王の任期も終わつていざ次の魔王決めるときこ起い奴が

いないわけ

「ふーん……」

「そこで思い出したのがジジイの言葉。家で厄介者として扱われてたジジイが、

”おーお、なんと冷たい家族たちじや。まるで冬にアイスを食つているような

冷たや。昔は良かつたのー、鈴木が魔王の頃はこんな事は無かつたのにー”

つて耳にタコができるべりてた訳

……あのジジイ、何かと問題のこしていくな。
もつ少し冷たく当たつておくべきだつたか？

「で、どんな奴か調べたら人間で言つただからビックリ。まあ、ほ

かに候補

いなからあんたに決まつた訳

「すまん、俺に拒否権は？」

「むつ、人間の分際で拒否とは如何に？ 拒否イコール死の方程式は既に成り立つていると

知つての反逆行為だよね？」

人間の基本的人権はこのチビ魔族には通用せず。
どうしてそういう重要なポストを君達はくじ引きとかそういう軽い
ノリで
決めてしまつのだ？

俺に選択肢は無く、再び魔王としてアリシュレードに君臨すること
になつた。

……不幸の手紙書いておくべきだつたかな？

第一話 「復活！ 嫌がらせジジイ！」

一年たつて無事平穏な生活が送れると思っていた矢先、突如モンタ議長の

孫娘エルナの陰謀によつて再びアリシューレードに招かれた。

俺は以前と同じように強引に魔王にされると、証であるファッショ

ンセンスの無い

黒いマントを羽織、金色の腕輪を腕につける。

そして玉座に座ると。

「はあ……」

思いつきりため息をついた。

最初からヤル気などゼロ。以前だつて何とかのらりくらりとかわして過ごしていた

ところの。第一、あの時はリーシュが……。

「リーシュ！」

そうだ。以前魔王になつたとき、秘書として働いてくれた女性リーシュ。

本名は長すぎてもう覚えてないけど、とても素晴らしい女性だった。それには会つて話したい事が沢山ある。

「なあ、エルナちゃん」

「エルナでいい。スズキ」

「あのさ、魔王の秘書で働いていた女性いなかつた？ リーシュ……なんたら

「ん？ ああ、そういうえば居たね

「何処？ 今何処に？」

「実家に帰ってる。なんかスズキが居なくなつてヤル氣無くなつたとか言つてた」

その言葉に少し胸が痛む。

ああ……確かにあんな別れ方したらそつとなつてしまつたか。

「呼び出せない？ 会いたいんだけど？」

「うーん、ちょっと難しいよ？ だつてさうこのヒロインは一人でいじつて

思つしー

「？ ヒロイン？ 何の話？」

「まあ出てくるのに後三話ぐらい必要じやないかなー？ そんな感じが

ビッグヒロイントレパシーで来てる！」

うんうんと頷いているエルナ。

一体なんの話だというのだろうか？ まあ、とりあえず呼んでくれるみたいだ。

「他に居なかつた？ こう、アホ面のキザ男とか、金髪の子供とかは？」

「ああー、居たなー。もう見るからにボケ役な男と生意氣なチビッ子が。

ボケ役は会社継いでるつて話で、チビッ子はやりたい事が沢山あるから旅に出るつて

「そつか……」

皆それぞれやるべき事があるんだな……。そうだよな、あれから一

年も
経つてまさか暇とかいう事はないよな。うーん残念。もひ一度でき
れば
ゼロ以外は会いたかったな……。

「あーあ、モンタ議長も死んで会えないもんな」

まあ、もう寿命で死んでもおかしくなかつたし、遅かれ早かれ会え
ない
運命だつたかも……。やつしてちよつとだけ悲しみに浸つてこると。

「ん？ スズキはあるジジイに会いたいの？」

「えつ？ まあ、少しだけ」

「会えるよ」

「……へつ？」

「でもねー、このまま放つておくのが一番いいと想つけどなー。会
つても
何にもいい事無いとおもうよ~」

あからさまに嫌そつとするエルナ。

しかし、本当に会えるのであれば一瞬でも会つてみたい。
だって死んでるんでしょう？ モンタ議長。

「じゃあ、ほんの一瞬でいいから。その後は強制的に帰してあげて」

俺の言葉にエルナはぶすつと頬を膨らませる。
そして、広間の中央に立つエルナ。

” ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレ……”

エルナが呪文を唱え始めると足元から円を描く様に青白い炎が立つ。そしてその炎はやがて円の中に五芒星を作り出す。何と本格的な魔法なのだろうか……。

”Hーット「ノアトナンダッタケ・アツ・ソウダッタ”

……えっと、今の呪文なの？ 普通の言葉みたいだったけど？ 更にエルナの詠唱は続き、そして最後に。

「出て来い！ 変態ジジイ！」

そしてエルナが魔法陣に手を当てるごとに、光の柱と共に煙が立ち込める。そして煙があさまり、出てきたのは……！

「もひし、もひしで女湯が覗け……あれ？ リリゼビージャ？..」

変態ジジイだった。

以前と変わらぬ姿。髪は白く雑草のよつよつよつよつと生えて顔が分からぬ。

立派なふさふさな髪。腰はほとんど九十度に曲がっているお爺さん。しかしあなじるながれ、あれは偽りの姿。H口に事になると機敏な動きができる

スーパー変態ジジイなのだ。

唯一変わった所といえば、頭に何やら二角巾を巻いているぐらいだ。

「死んでからも元気そうですね、モンタ議長」

「ムツ？ おおつー 本田ー ホンダではないか！」

「あの、鈴木ですか？」

「わかつてあるわい。アリシュロードジョークじゃ、ジョーク」

ヌハハハと笑うモンタ議長。

あー、元気な事も分かつたし、もう帰つてもらおうかな。

「ジジイ、死んでからも女風呂覗いてるのか？　この恥さらし」「むつ、エルナか？　どうした？　ワシをこんな所に召喚などしあつて。

あつ、さてはワシに会いたくなつたとかか？　可愛い奴じやのー」「誰がだ、ボケ。スズキが会いたいっていうから召喚しただけ。あんたの顔なんか

家に置いてある写真でも黒く塗りつぶしてやる

「ぬはつ！　何という孫じや！　育ての親の顔が見てみたいわい！」

感動の再開に一人の怒りは既にMAX寸前。火花が飛び散つてます。よほどエルナはモンタ議長の事が嫌いみたいだな……。

「あー、モンタ議長もつ帰つていいですよ」

「おぬしも酷いのう……呼びつけておいてサラリと帰れ発言とは。もう少し年寄りをいたわらんか」

「とは言いますが……」

「スズキ！　このジジイもうあの世に帰していいよね！」

親の仇を見るかのような目で俺に訴えてくるエルナ。

まあ、目的は果たしたし、このままモンタ議長に居られてエルナの機嫌を

損ねてもよくないしな。と言つわけで、俺は気兼ねなくOK、良いよーと笑顔で

GOサインを出す。

「お主！ それはあまりにもあんまりではないか！」

「まあー、これは仕方ないです。そつととあの世に帰つて静かに暮らしてください」

「わ、ワシに何か恨みでもあるのか鈴木！」

「ありすきて困るぐらいですよ」

エルナが再び呪文を唱え始める。

モンタ議長の足元に魔法陣が浮かび上がり、少しづつ体が魔法陣に飲まれていく。

そうして全てが飲み込まれ、再びあの世にモンタ議長は帰つていった。

「全然変わつてなかつたな、モンタ議長」

「だから言つたじゃない。会つてもいい事ないよつて」

そうしてエルナがフンと顔を背ける。

けれど初めて懐かしい人と出会えてビニカホツとしていた。
しかし……。

「あれ？」

突如床から魔法陣が浮かび上がる。そして、そこから何故か再びモンタ議長がポーンと投げ出されるかのように飛び出ってきた。モンタ議長は飛び出したときに打つたのか、腰をさすっている。

「ど、どうしたんですかモンタ議長？」

「いや、実はのう、一回向こうで帰つたのじゃが、”もつお前帰つてくるな。

お前が居るとはた迷惑だからもう一度向こうに行つて來い”とあの世の偉い

方がワシを追い出しちゃったのじゃよ」

参った、参った。と簡単にそんな事を言つモノタ議長。
えつと……それってつまり。

「まあ、またよろしくと言つ事じやな。おぬしもワシが帰つてきて
うれ……

ブルワアアアー！」

顔が歪むほどの一人の正拳突きがモンタ議長に炸裂する。
ああ……俺が召喚したばっかりに要らない人材がひとり増えてしま
つた。

第二話 「素晴らしいボケ役」

モンタ議長が生き返って一週間が経過する。相変わらずモンタ議長とエルナは仲が悪い。ちょっと皿を離すと殺し合にするぐらい。

しかし、喧嘩するほど仲が良いともいつからアレは一種の愛情表現なんだろう。

うん、そう思つておいつ。

俺がアリショーレードの魔王として君臨した事は既に世界に知れ渡つている。

これを聞いてリーシュが来てくれる嬉しいのだけど……。そんな事を思いつつ、広間にテーブルを置いて三人で朝食を摂つていると。

「ん? 何か下の階がさわがしいよスズキ」

「えつ?」

うーん……言われてみれば、なにやら悲鳴に近い声に、馬の鳴き声に似たような声が。地鳴りのような音がどんどん広間に近づいてくる。

「ハーッハハハ!」

「! 」「この声は……」

俺の第六感が告げる。この笑い声の人間にはあつてはならない。というよりも、会いたくない。

そんな俺のささやかな願いも虚しく、広間のドアが思いつきり開かれる。

「ひつさしふりだねー、魔王君。元気だつたかい?」

白い馬にまたがり、キザっぽくも馬鹿っぽい男が姿を現す。髪は背中の辺りまでアリストレーで紫。

髪は背中の辺りまでありストレーで紫。頭には小さい角が一本生えており、体はスマート。体には豪華な金細工を見につけるブルジョアな奴。俺が一番会いたくなかった奴が姿を現した。こいつの名前はゼロ。リーシュに片思いをしている魔族だ。以前も何かと俺に突つかかってくるはた迷惑な男だ。

「えーっと、来てもらつた所悪いんだけど、帰つて。というより帰

「ハーツハハハ、以前にもましての冷たい言葉。うーん、魔王君が帰つて來たと

実感するよ、その言葉」

「や、やめんか！ 暴れるな！」

ゼロが来ただけでも嫌なのに、更に馬なんか連れてくるなよ。
馬の被害を受けるエルナとモンタ議長。

「とりあえずその馬片付けてくれ。何かと迷惑」

「うそ、悪いね、僕のマイサラブレッドがお茶目な事をしてしまつて」

そう言つてゼロは馬を魔法でポンとかき消す。はてさて、静かな朝食がイキナリのハプニングにより中断されてしまつた。

この落とし前はどうつけるのか張本人に聞いてみよう。

「ゼロ、俺達の朝食が全て馬に食われたのだがどうしてくれる?」

「そんな事言わてもねー、ばかあ、魔族ーの金持ち、いわゆる「
ルジヨア?」

そんな朝食一つで四の五の言われても……」

俺はともかく、後ろの二人は鬼のような形相でゼロを見ている。
食い物の恨みハラスベカラズ、と目が血走っている。

それを見たゼロも些か命の危険を感じたようで、咳払いをすると。

「そうだね、魔王君が帰ってきた際に飯を奢りつつ。さて、何がいい?」

「ヤター! 気前いいぞボケ役! 私、アリシユーレードピッツア五
人前!」

「ワシはカニのポテトに、モコモコの唐揚げ、それに酒をつけてく
れい」

「あー、俺品物分からないうから適当で」

それから出前が届くと広間は宴会のような状態に。に。
たつた四人しか居ないというのに凄いはしゃぎよう。
特に酒の入ったモンタ議長とエルナは肩を組んで
仲の良さをアピールするほど。

やっぱり血筋だな、と少し思っていた。

「なあ、ゼロ」

「ん? なんだい魔王君?」

「……あれからリーシェはどうだつた?」

「ああー、凄いショックだったよ。ばかあ彼女を慰めようと

実家にまで尋ねたのだが何故か警察を呼ばれてねー。
どうしてだらうか?」

うーん、と腕を組んで真剣に考えるゼロ。

いや、それ一步間違えればストーカー。

そんな会話をしていると、ふと真剣な表情をするゼロ。

「いや、君が帰つてきてくれて良かつたよ」

「……どうした? 何処か頭を打つたのか?」

「いや、そうじやないんだ。実はね、ほらあの子のせいできょっと
ね」

そう言つてゼロはエルナを指差す。

なんだ? エルナが一体何をしたというのだろうか?

「彼女が前魔王と言う事は知つてるかい?」

「ん? ああ。そういえばそんな事言つてたな」

「その時はもう、悲惨だったんだよ。彼女、魔王だからってやりた
い放題」

ゼロのコップを持つ手が震える。

まるで犯罪者の自白のよつた感じだ。

「た、例えば?」

「そうだね、例えば……」

「おい! ボケ役とスズキ! 何しんみりと話してるのでー!」

片手に酒を持つたエルナが俺達の側に来る。
ものすゞく良い笑顔で俺達に話しかける。

「いや、ちょっと大事な用をゼロと話していたんだ」

「そうなのか？ ボケ役？」

「まあボケ役って名前じゃないから。ちゃんとゼロって名前が

「

「ボケ役、何か芸を披露しin」

「へつ？」

ゼロがきょとんとした表情でエルナの顔を見る。

突然の無茶難題に戸惑いを隠せない状況。

「な、何故だい！？ まあそんな話初めて聞いたよ！」

「当たり前だ、今決めたんだから。せーつかくスズキが帰ってきたんだ。

芸の一つや一つ披露できずにどうしてアリシユーレードで

お笑いのトップを狙えるか？」

「ぼ、まあそんなの狙つてないから！」

ゼロの必死の言い訳をものとしないエルナ。

エルナってわがままと言つか、話を聞かないというか……。

結局根負けしたゼロは渋々皆の前に立ち芸を披露することに。

モンタ議長とエルナは箸と皿でズンドンパフパフと騒ぐ立てる。

「それでは……それっ！」

そう言つてゼロはハンカチからハートを出したり、何も無いところから棒を

取り出したりと見事な手品を披露する。ゼロの意外な部分を垣間見た。

それを見たエルナは 。

「ブツブー、最悪。そんな子供騙しで機嫌をとるなどとは『腹痛いよボケ役。』

「芸の何たるかを分かつてない」

「ひ、酷い言によつだねエルナ君。例えばどんな事がいいのだい？」

「うーん、私としては人食い虎にふんどじ一丁で立ち向かうべらいの芸は

見せて欲しかったかな。もしくはドラゴンを素手で殺すとか

はてさて、それを芸と呼ぶのかどうかはともかく、エルナの奴とも
でもない

わがままっぷりだな……。これが前の魔王というのだから恐ろしい。

「よし、それじゃあズズキいつてみよつか！」

「えつ！？ お、俺も！？」

「モチロン。魔王として立派な働きを期待しています」

期待も何も、俺に虎と格闘などはできないし、ましてや手品も
できないというのに期待をされても……。

とりあえず俺はみんなの前に直立不動で立つ。
皆さつきのゼロと同じように躊躇立てる。
えーい、どうにでもなれ！

「えーっ、一発ギャグします。布団がふつ

「おもしろーーー！ さすがズズキだ！」

「えー！ いやまだ何も言つてない！ 言つてないからーーー！」

「分かる、私には分かるよズズキ。その単純なギャグの中に
ぎつしつと詰まる奥深さ。そしてワビ、サビ。

なんという素晴らしいギャグ！ そのボケ役とはえらい違いだ

うううん、となにやら感動に浸つている様子のエルナ。

いや、ワビサビって意味分かって言つてるエルナ？
まあ、何はともあれ結果オーライ。

「ほかあ魔王君のギャグがいまいちわかんないけど？」
「ワシもじや。まるで凍死するかのよつた寒いギャグの
予感がしたのは気のせいか？」

二人して首をかしげるゼロとモンタ議長。いや、そのとおりです。

「そうだ。それじゃあエルナの一発芸つてのも見てみたいなー」

「ん？ 私の？」

「そうそう。一度お手本を見てみたいよね？ なあみん」

俺がゼロたちの方に意見を求めようと振り向くとなぜか遠ざかる一人。

そしてマッハの速度で首を横に何回も振る。あれ？ もしかして
嫌な予感？

「そつかー、そだよね。良し！ ここはスズキの為に一肌脱いで
あげましょー！」

「あー、ごめん、嘘です。やつぱり遠慮しておきます」

「覆水盆に帰らず。一度吐いた言葉を飲み込むことは不可能なので
すよスズキ。

やつてあげましょー！」

そうしてエルナは広間の中央に立ち、巨大な魔法陣が浮かび上がる。
今まで見てきた中でも最高の大きさ。

「ゴゴゴ」と城全体が揺れ、なにやら酷く嫌な予感タップリ。

「ち、ちなみにエルナは何をするつもつなのー？」

「そだねー、取りあえずこの世界で一番強い奴召喚して戦うつていう極ありきたりな芸を披露しようかと」

「だからそれ芸違つからー！ やめて！ ストップー！」

ビカビカーと妖しく光り輝く魔法陣。

そして迫る死の予感。

そうしてこの世界で一番強い奴が姿を現す ！

第四話 「懐かしいエルナ？」

エルナの魔法陣が妖しく光り輝き、ついに姿を現す「」い奴。ゼロとモンタ議長は城の片隅で念仏を唱える始末。俺はエルナの召喚をただ呆然と見つめる。そして。

「出て来い！ 一番凄い奴！」

そのエルナの言葉を合図に白い煙が辺りを包み込む。あまりに凄い煙の量にゴホゴホと咳き込む。あたり一面煙の海で数メートル先が見えないほど。

「おーい、エルナ！ モンタ議長！ ゼロ！ 何処だー！」

俺は必死に呼びかけるものの何の反応もなし。そうして煙の中を歩いていると突然背中から何かがぶつかってきて思いつきり地面に倒れる。しまった！ もしかしてエルナの召喚した奴！？ 俺は必死に逃れようとするが何がが上に乗つかっているのがビクともしない。

殺されると思った瞬間 。

「むふふー、聞いたことがある声だと思つたらヤッパリ」

「！ そ、その声はもしかして！？」

聞き覚えのある透き通つたような高い声。

俺は背中に乗つかっている人物を見ると、そこにはショートカットの金髪の小さな子供が居た。

蒼く輝く瞳。輪郭は丸みをわずかに帶びて幼さを漂わせる。そして、何よりも田を引くひまわりのよつたな笑顔。この子供を俺は知っている。

「 ウィル！ 何時の間にこいこい？」
「えへへー、今さつき」

「コニコしながら俺の背中から動こうとしない子供。この子の名前はウィル。」

以前何かとお世話になつた子だ。結構ヤンチャで手を焼くちびっ子。けれどこの子は少し変わつた事情があつた。

まあ、それはすでに終わつて普通の子供になれたはずなのだが……？

「 ウィル何処から入つてきたんだ？ 全然気づかなかつた」「んー、実は僕もわかんないんだよ。気づいたら突然この場所に居てね、近くで声がしたから 来てみるとお兄ちゃんが居たつて訳……までよ、それつてつまり。」

「あー！ スズキに誰か乗つてる！」

エルナの驚いた声が城内に響き渡る。周りを見るとすっかり煙は晴れていた。エルナは俺の上に乗つかつてゐるウィルに指を指す。

「おおつー ウィル、ウィルではないか。なつかしいのう」「あれ？ モンタおじいちゃん？ 確か死んだはずじゃなかつたの？」

「ワシにも色々と訳があるのじゃよ。まあそこは聞かないでおくれ

ふう、とため息をつくモンタ議長。

まさかあの世で門前払いされたとは言えないよなー。
ゼロもウイルと会つて懐かしそうに話をしていた。
しかし……なぜかエルナの様子がどこかおかしい。
何かこう、嫌そうな感じをかもし出していた。

「エルナはウイルと初めて会つのか？」

「違う。このチビとは以前に面識あるよスズキ」

「むつ、なんか気に入らない声がすると思つたらモンタじいちゃん
の孫娘のペチャパイ娘じやん」

互いにこめかみに青筋を立てながらバチバチと火花を散らす。

竜虎相打つ。

二人からはなにやらオーラのよつなものが見えていた。

俺はモンタ議長の隣に駆け寄り、どうこう事情なのか聞いてみる。

「あの、一人とも何かあつたんですか？ 憲い險悪んですけど？」

「おお、そういえばあの時おぬしはおらなんだな。ふむ、いいじゃ
ろ、少し長いが話をしてやるう」

そういってなにやら真剣な顔をして過去の回想を語りだす。

「そう、あれはお主が帰つてエルナが魔王になつたときじやつた

「

” 今日から魔王になつたエルナだ。皆アロシク！ ”

家臣達はあんな小さい子が魔王になつたと聞き、はあー、とため息をついたものじゃ。

あんな子供に責任重大な魔王が出来るのかどうか……。

それを見たエルナはと言つとじやな。

” お前らクビ。出て行け ”

などと家臣全てを首にしてしまつてな。

それを見た心優しきウイルがエルナに立ち向かつたのじやよ。

” ちょっと酷すぎだよ。何もそこまで言わなくとも ”

” つるさいチビ。お前もクビ ”

後は地獄じやつた。

あつさりと戦いの火蓋は切つて落とされたのじやよ。
互いに勝るとも劣らぬ魔力を秘めてあつてな。二人は三日三晩戦い
続けたのじや。

あの時はアリシュレードは火の海と化すかと思つた。
逃げ惑う人々と魔族。

そして四日目の朝 。

” ムカついたー！ 良いよ！ 出て行つてやるもん！ ベー！
僕だつて他にやる事いっぱいあるし！ バカバカバーカ！ ”

ウイルが世界の為を思つて自ら身を引いてくれたのじや。
そして世界を巻き込んだ子供の喧嘩は終わったのじやよめでたし、
めでたし……。

「と、いうわけじゃよ」

「分かりました。分かったんですけど、全然めでたくないですよそれ！」

つまり、その犬猿の仲とも取れる一人が感動の再会を果たした。それが意味するもの、それは再び喧嘩が始まる前兆じゃないか！

「わざわざクビになつたのに戻つてくるとはいひ度胸だなちびっ子」「君だつてチビじょんか。さらにまな板娘」

さらにはヒートアップしていく互いの怒り。
魔王としてこゝはこの一人を止めなければ！

「う、ウイル落ち着け！ それにエルナも！」

「お兄ちゃんはそういうけど、向こゝはヤル氣だよ？」

「それはこゝちの台詞。スズキが言つてるからやめてあげてもいいよ？ 私も

弱いものイジメは嫌だし」

ブチッ、とウイルから何かが切れた音がした。

スマイル全開、ヤル氣全開。ウイルはなにやら両手を前に広げ、呪文を唱えだす。

「ぬ、ぬお！ あ、あの呪文は！」

「えつ？ 何があるんですか？」

「アリシュレードに伝わる禁呪じょ！ 一度放たれれば半径百キロ

は焦土と化し

向こう「十年は生物が住めない破滅の」

「ウィルー！ 止めるー！ そんなもん放つんじゃない！ という

より、何でそんなものを

唱えようとするんだ！」

「大丈夫だよお兄ちゃん、ちょっとこの生意気娘を懲らしめるだけだから」「

「大丈夫じゃない！ 僕たちが大丈夫じゃないから！」

半径百キロが焦土と化す魔法を唱え始めるウィル。

その魔法の強大さを分かつてているのか、エルナの顔がこわばる。エルナもまた、なにやら両手を上に掲げて唱え始める。

「ぬ、ぬほ！ あの呪文は！」

「何ですか？ また禁呪ですか？」

「うむ。巨大な隕石群が空から降り注ぐといつあつさりした魔法じやな。まあ、こればかりは

当たる場所は運任せじゃ。直撃した部分は、まあ、この臨終といつ事でOKじゃな？」

「OKできません」

城が一人のちびっ子の魔力で地震が来たみたいに激しくゆれる。二人から直視出来ない程の光がほとばしる。

「ど、どうにか止める方法ないんですか！ モンタ議長！」

「ぬう、何とかあやつらが立つている下の魔法陣に入り込めねば何とかなるはずじゃが……」

「じゃが？ 何ですか？」

「入った途端、その魔力を浴びてしまつからのう……痛いどじろじやすまんぞい」

「むう、確かに。」

ただでさえとんでもない威力の魔法を唱えているのだから、下手すれば死んでしまう。

「死んでしまう？　まてよ……。」

俺はチラリと横にいる『老人』を見る。

「むう？　なんじゃ？　わしの顔に何かついてあるか？」

「モンタ議長、すみません。俺たちの為にもう一度死んでください」

「へつ？　お、おぬし何をかんがえ　おわあああ！」

モンタ議長が話し終える前に俺はモンタ議長の服を掴み、そのままスローライン。

やはり幽体は軽い。勢い良くエルナとウイルの魔法陣が重なつている部分にスッポッと入る。

瞬間。

「ピギヤアアアア！」

あらぬ声をあげ、モンタ議長の体がとても明るく発光する。どうやら一人のとんでもない魔力がモンタ議長の体を通して流れているようだ。

何分か続いた後、黒焦げになってその場にうつぶせに倒れるモンタ議長。

それと同時にウイルとエルナの魔法陣も消えてしまった。

「お兄ちゃん酷い！　なんで邪魔したの！」

「ズズキ！　どうして！」

「どうしたもこうしたも無いだろ一人とも！　一人仲良く！　これが一番！」

これが可愛いチビッ子同士の喧嘩なら放つておくが、死活問題となれば話は別です。

俺は一人に近づき、お互いの手を取り、握手をさせる。嫌そうにウイルとエルナはお互いを見つめる。

「お願いだから、一人仲良くなね？ 皆の為、俺のために。ね？」

「……分かったよ、お兄ちゃんの為ね」

「……スズキの為にね」

「ぶすつ、とする一人。

また厄介な種が一つ増えてしまった。

さてと、何とか一人をなだめる事に成功したし……向こうで黒焦げになっている老人をどうしようか悩むのであった。

……火葬は無理かな？

第五話 「ただいま」

果てさて、実はこの世界はチビッ子一人の機嫌で崩壊するという事実を知った。

ウイルとエルナは相変わらず険悪な仲で、これはどうにかしないといけない。

そして、城の中に何時までも屈座る「老人」と、ブルジョア魔族もどうすれば

いいか頭を悩ませる種になつていて、

以前とは違つて、てんてこ舞いの毎日。
異常とも言える重労働によつて体はへトへト。
ベッドに入るや否や、すぐに寝てしまつ。

ああ……こんな時にリーシュが居てくれたら。

「ん……」

朝、外からの異常な音によつて目を覚ます。
何か凄まじい騒音が聞こえる。

おもむろにベッドから立ち上がり、窓のカーテンを開けて外を見てみるとそこには

ヘルメットをかぶった厳つい魔族の集団が工事をしていた。
その中心には作業を指示するピンク色の髪をした魔族が。
それが誰なのか言つまでも無いだろう。
とりあえず頭を悩ませながらその現場へと向かつ事に。

「おーい、エルナー！ なにやつてるんだよー！」

騒音の為、大声でエルナに声を掛ける。

「どうやら声が届いたらしく、俺の方を振り向くエルナ。すぐさまエルナのほうへと駆け寄る。

「スズキどうした？ 何があつたのか？」

「何があつたじゃないだろ？ これは一体どういう事だよ？」

目の前で行われている珍現象を指差す。

幾ら広大な庭があるとはいえ、勝手に工事などされでは困る。それに工事とは名ばかりで、設置されているのは地雷やらトラバサミなどの
トランプ
農の類ばかりだ。

「スズキ、これには川よりも深い訳があるので」

「いや、川はそんなに深くないよね？ むしろ浅瀬。で、どんな訳？」

「うむ。それは……私のポジションを守る為だー！」

ビカビカー！ とエルナの背後に落雷が落ちる。
……いかん。なんの事だかさっぱり分からぬ。
最近のエルナの言動についていけなくなってきた。

「えつと、どういう事なのかな？」

「これだけ言つても分からぬのスズキは？ ぶっちゃけ聞くけど、
私つて

「どういうキャラ？」
「……お笑いキャラ？」

あつ、まずい。どうやら今のはエルナの逆鱗に触れたようだ。
「ソコスマイルで”良い度胸してるね、スズキ。次ソレ言つたら
コロスからね”的な

視線を瞬時に感じ取った。

俺は気を取り直して心にも無いことを言つ。

「ひ、ヒロイン？」

「そう！ それなのスズキ！ 私は唯一無二にして絶対のヒロイン！ 全ての男を骨抜きにするこのラブリーな瞳！ 皆の視線が釘付けのナイスバディ！」

そして極めつけが完全無欠のこのビジュアル。私はこの世で一番ヒロインにふさわしい女性なの！」

自画自賛して自分にうつとりしているエルナ。

……まあ、何だ。聞かなかつたことにすれば大した問題ではない。

「それで？ 良く分からぬけど、エルナはポジションを守るためにこんな大掛かりな工事をしているわけ？」

「おう。来るべき敵に備えて万全の態勢を整えておかねばならないからね。

だからこつしてボケ役の会社従業員を二十四時間態勢で働かせている。

もちろんボランティアで」

「……ちなみに、ゼロの許可は？」

「問題なし。少し五月蠅かつたから裏山に埋めて来た」

サラツと殺人を自供する犯人。

まあ、手遅れかも知れないけど後で助けに行くとして。

「エルナがそこまで危惧する人物つて誰？」

「えーっと、リーシェ何たらつて人」

「へー、やうなんだ」

リーシェ何たらかー……。確かにリーシェならエルナのヒロインの座も危ないかも……つてええ！？

「り、リーシェ！？ リーシェが来るの？」

普通に聞き流していたけど、リーシェという言葉を聞いて驚く。もしリーシェが来るのならこれ以上嬉しいことは無い。

「うむ。おそらく今日当たりくるでしょ」
「それが本当ならパーティの準備を……」
「必要なし！」

クワッ！ と目を見開いて断固拒否するエルナ。

「ど、どひして？」
「いい、ズズキ？ あの人、が來たら私の出番少なくなつちやうかも
しれないんだよ？」
「いや、別に構わないような気も……」
「ほほう」

ビカー、と目を光らせるエルナ。

それを見た瞬間、背筋に何かゾッとするものが込みあがる。
なんというか、サスペンスドラマで振り返つたら殺人犯が居る状況。
つまり、絶対絶命的なものを感じ取る。
すかさず、”やだなー、[冗談ですよ、[冗談”と、切り替えす。

「私の出番をこれ以上減らされても困るし、あの人には悪いけど、

死んでもらうのが最善かなー、と結論に達したわけで
「いや、二人仲良くすればいいだけじゃないかな？」
「シャラーップ！ そんな仲良しによしできる訳無いでしょ！ 良
い？」

田の前に食べ物が一つあつて半分個なんじとは出来ないんだか
らー！

「この世は所詮弱肉強食の時代です」

どうやら何があつてもリーシュを「生き者」ひとつと考へて居るエル
ナ。

しかし、俺としてはソレは何があつても止めて欲しいわけなので。

「わかった、こうすればいいんじゃないかエルナ

「ん？」

「エルナはヒロインで決定。リーシュはサブキャラで決定。これで
万事解決じゃないか？」

我ながら良い提案。

これならエルナも文句をいう訳無いだろ？……。

そう、思っていたのだが。

「んなことで解決できるわけないでしょーーー 馬鹿ー！」

あつさり否定されました。おまけにグーパン付。

「サブで収まるような器だつたらこんな事しない！ サブに甘んじ
つつ、いつの間にか

ヒロインを抜くぐらいいの人気が出てるなんて法則は幾らでもある
んだからー！」

それだけ言つとエルナは工事を進める。

工事は着々と進み、ついに完成。

広大な庭は見る影もなくなり、あちからひからひからトランプが見え隠れする。

「良し、これで準備は万端。後は獲物が罠に掛かるのを待つだけ

エルナはフフリと悪魔のような笑みを浮かべる。

うわー、嬉しそうだなエルナ。

「さてと、腹が減つては戦が出来ないので、お皿にしようよスズキ

「えつ？ もうそんな時間？」

「つむ。お口様が真上に来てるでしょ？」

天を指差すエルナ。たしかにお口様が真上にきていた。
仕方が無いので俺とエルナは城に戻り、台所へと向かう。
すると、なにやら台所から良い匂いが漂ってくる。

「あれ？ だれか居るのかな？」

台所のほうを覗くと、鼻歌を口ずさみながら誰かが料理を作つていた。

後ろ姿からだと、びつやう女性のようだが？

「あの……」

料理の邪魔になるかもしぬないが声を掛けてみる。

すると、その女性は俺の方を振り返る。

女性の姿を見て心底驚く。

エプロン姿で料理をしている女性。煌く黄金の長い髪をなびかせ、

目は慈愛に

満ちたような優しい黒い瞳。

スラッシュとしたモデル顔負けのスタイルとプロポーション。彼女もまた俺の顔を見て驚いていた。

「リ、リーシュ！？」

「お、王様？」

あまりに意外な出会い方に虚をつかれたような感じだった。嬉しさと驚きが重なり硬直する。そんな状態の時。

「な、何でここに居るのー！？」

後ろからエルナの叫び声が聞こえ、硬直が解ける。

「どうやってこの城に忍び込んだのー！ あなた！」「どうやってと言われても……普通に入つてきましたけど？」
「嘘だー！ あの完璧な罠包囲網を潜り抜けたと言つの！？」
「えつと……もしかして朝の工事の事ですか？ 工事の邪魔をした
ら悪いと思つて

「そりお城の中に入らせてもらいましたけど」

その言葉にエルナは非常にショックを受けた様子。ボロボロと涙を流してその場から走り去つていった。まああれだけやって無駄に終わつたというのは辛いものがあるよな。そして台所で俺とリーシュの一人つきりになつてしまつ。しばらくぶりに見たリーシュはまた一段と綺麗になつているよう見えた。

けれど最後に別れた時のことが脳裏によぎる。

最初にババアが話すのが何でござる。

「王様……」

「あ、な、何?」

ドギマギして次の言葉を待つ。

どんな酷い事を言われるかとおもつてこたら。

「お帰りなさい

優しく微笑み、そんな言葉をかけてくれた。

その言葉で今までに無いぐらい実感が湧いた。

ああ、本当に俺はこの世界に戻ってきたんだと。

「……ただいま、リーシュ」

第六話 「お掃除しましょう」

ついにリーシュが帰つてきてくれた。
感動の再会の後、リーシュにまつ一度秘書をやつてくれないか頼む
と。

「はい。私のほうこそお願いします」

と、快く引き受けてくれた。

こうして前にいたメンバーが全員揃つた。……内、一人がいらない
けどね。

城の中もにぎやかになり、仕事のほうもリーシュと分担してこなし
ていく。

しかし……。こうして全員そろつと何時も嫌な事の前触れのような気
がしてならない。

そしてその予感は的中する。

「ふう」

仕事のほうも一息ついて玉座に座つて一休み。

今は自分で淹れたコーヒーで一息ついていると、目の前の扉が突如
開かれる。

「やつほー、元気だつたかい魔王君？」

ワルツを踊るよつてぐるぐると回りながら俺の方へと向かつてくる
ゼロ。

鼻歌なぞ歌つてゐる始末。

そしてキョロキョロと周囲を見渡し。

「おや？ リーシュは？」

「リーシュならちょっと遠くに買い物を頼んでる。しばらくは帰つてこないぞ」

コーヒーを飲みながら返答する。

ゼロはどうせリーシュに会いに来たのだらう。それを告げたら帰るかと思ひきや、なにやら不気味な笑みを浮かべるゼロ。

「ふむふむ……それは丁度良かつた」

「え？」

「魔王君、実は君に相談があるのだが」

ズズツと俺に顔を寄せてくるゼロ。怖い。顔も怖いが、頬みどじでくる」と自体が怖い。

凄まじく嫌な予感がしてならない。

「なんだよ？」

「実は最近リーシュの様子がおかしいんだよ」

「リーシュが？」

「ほかあたまたま、なにやら拳動不審な動きをしながら部屋の中へ帰つていくりーシュを

殴り撃してね。何か部屋に隠しているようなんだ」

リーシュが隠し事？ まあ、人には言えない隠し事なんて一つや二つあるだろうに。

「それで？」

「だからね、僕と魔王君の一人でリーシュの部屋を覗いてみないかい？」

「断る。断じてことわる」

確かにリーシュの隠し事は気になるが、それ以前に女性の部屋に勝手に侵入するのはポリシーに反します。

「魔王君、今しか無いんだぞ！？ リーシュが帰つてくる前に、彼女の秘密がどんなものか

知つておく義務はあるんじゃないのか？」

「ない。そんな義務は全く無い。べつに俺はリーシュを信じてるから良い。」

「……ほう？ では他の男と付き合つていても君は放つて置くと？」「良し、今すぐ行こう。俺はリーシュを信じているが、隠し事は無いようにしないとな」

「さすが魔王君！ 話が分かるね！」

そんなこんなでゼロの口車に乗せられてリーシュの部屋へと向かう事に。

廊下を歩き、リーシュの部屋の前に来る。

リーシュの部屋の前に可憐らしく熊のマスクコットが表札を持つており、そこには

『つーしゅるどるービ・ぱまとつおつと・でいす・ぱーる・でもんとあるもーでいす』

の部屋とフルネームで書かれていた。

そしてそこで一番田を惹くものは、さつげなーーく、本當にさりげなく名前の下に。『のぞいたら殺しちやうだ？』と可憐らしい丸文字で書かれてあつた。

きやー、可愛いらしい文字とのギャップが激しそぎて、今すぐその場から逃げ出したい衝動に駆られています。

「ゼロ、絶対まずいぞこの展開」

「何言つてるんだい魔王君。ここまで来たら引き下がれないだろ？」

それに、大丈夫
手段を考えてあるから

「はい、と俺になにやら水色のツナギを渡してくれるゼロ。いそいそと服の上からそれを着ている。

「なんだこれは？」

「いいかい魔王君、僕たちは今からリーシュの部屋を掃除に来たんだ。だから決して

のぞきなんかじやない。分かるかい？」

「あつ、成る程。清掃員の姿をして侵入すれば……」

無理です。絶対この戦法は通じない。

見つかった瞬間、肉ミンチは間違いないかと。しかし、念のためいそいそと俺も着替える。

そして二人揃つて清掃員の格好をしてリーシュの部屋の前に立つ。

「リーシュ、掃除しに来たよー。居ないのでたら勝手に入るよー

「いや、勝手に入るなよゼロ。おかしいだろそれ」

ゼロは片手で軽くノックしていると同時に、もう片方の手でピッキングを駆使するというなんとも器用な行動をしていた。そして鍵のかかったリーシュの部屋があっさりと開く。こいつ、今度から出入り禁止だな。

とつあえず用を早く済ませようと中へと忍び込む。

中に入ると、部屋はピンク色で調和されており、可愛らしさと熊のぬいぐるみや、

小物がおいてあった。

実際に女の子といわんばかりの部屋の中。中は俺たちが掃除するまでもなく

綺麗にされてあつた。

「さてと、見た感じ何もなさそうだけど?」

「魔王君、そんな秘密をあつさつと見えてる所においておくわけ無いだろ?」

「ひ、早く帰つてくる前に搜してしまおつ」

「……つかぬ事を聞くが、何故お前は入つてきた瞬間にリーシュの洋服タンスを調べている?」

「何故つて……一番重要なだから。ぬぬっ! こんな派手な下着をリーシュが……! ?」

下着を手に取りワオー、と叫ぶゼロ。

コイツ絶対出入り禁止。むしろ世のためを思つて今の内に亡き者にするべきか?

「真面目にやれゼロ! リーシュに見つかつたらあの世に行くんだけ! ?」

それからベッドの下、机の上などあつとあらゆるところを探すもの何も見つからない。

「こうよりも、隠すスペースが見当たらない。こんな狭い部屋の中で何を隠すとこののだ?」

「ゼロ何も無いぞ?」

「おかしいね……彼女の態度からして必ず何かがあると思つただが

ふう、とため息をつく。

探し回つて疲れたため、近くにある壁にもたれかかる。と、その時。

「おわつー？」

突然壁が回転する。

そのまま後ろに倒れる俺。

何とそこには隠し階段が存在していたのだ。

「！」、これは……」

「魔王君お手柄だね！　さつとこの先にリーシュの秘密があるに違いないよー！」

突如現れ謎の降りる螺旋階段。

俺とゼロはその階段を一步一步慎重に下りていく。

中は暗く、壁はレンガでしっかりと出来てあり、かなり丈夫につくられていた。

そしてどんどん下へ下へと降りていくと、光が見える。

階段を降りきつた所には大きな扉があり、中から光が漏れていた。俺とゼロはその扉に手を当てて。

「じゃあいぐゼロー！」

「オッケー！　つまおおりやあー！」

ギギッと軋む音を立てながら扉は少しづつ開いていく。

そして、俺たちの目の前に現れた光景は　。

「……え？」

二人揃つてハモツてしまつ。

それもそのはず。俺たちの田の前に姿を現したのはガラクタの山。ぶら下がり健康器、飲んだら瘦せると書かれた薬。どれもどこかで見たことがあるものだ。

俺とゼロは目の前にあるガラクタの山に足を踏み入れる。

「これは一体……ん？」

ガラクタの山の横に山積みなつてゐるダンボールの山。それを一つ手に取り
まじまじと眺めると、そこにはアリシューレード通販、と伝票がうつ
てあつた。
つまり、このガラクタの山は全て……。

「リーシュが買つた通販の山！？」

「成る程。そういうえばリーシュは毎のショッピングを最近熱心に見
てたね」

「はあ、そういう事か。しかし、よくこれだけ買い物したな……」

リーシュの本当の姿を一部かいま見たような気がする。

さて、分かつたら長居は無用だな。

俺とゼロは踵を返して元来た道を帰るつと　あら？　田の錯覚で
しじうか？

田の前にリーシュの姿が……つて、ええ！？

リーシュはとても良いスマイルを見せながら俺とゼロの退路を塞い
でいました。

「どうしたんですか？ 王様、それにゼロ？」
「はわわわあ！ り、リーシュこ、これはその……」

「ぼ、ぼかあ、そう清掃！ 清掃に来たんだよ！ 魔王君と一人で

んな言い訳通用するか！ と心で突っ込む俺。

「あら、そうだったんですか～？」

……あれ？ 意外にもリーシュは深く追求せず俺たちの言ひ訳を鵜呑みにする。

もしかして、通用した！？

「そ、そなんだリーシュ！ 僕たちは掃除しに来たんだ」「成る程、分かりました」

なんという僥倖！ まさか本当に通用するとは！ ゼロの考えもたまには役に立つのだな。

「二人じゃつらいでしょ。私も手伝いますね」「えつ？ だ、大丈夫だよリーシュ。俺とゼロの二人で何とかなるから

「いえいえ、そういう訳には行きませんよ。だって”大きなゴミ”が”二つ”

”私の目の前に存在していますから”」

こめかみに青筋を立てながら、口と笑うリーシュ。

ところで、所々強調している部分があるのは何故ですか？

「さてと、どう掃除すればいいか迷いますよねー？ 王様？ それにはゼロ？」

指をバキバキ鳴らしながら俺たちを見つめるリーシュ。

わーい、やる気満々ですねリーシュさん。ビニから手をつけるのかは
あえて聞かないほうが良いのでしょうか？

「あの、とりあえず」「めんなさい」

脊髄反射的に一人揃つてその場で土下座。

そして恐る恐るリーシュの顔を見ると先ほどと変わらぬ良い笑顔だ
った。

「さてと、準備はいいですか王様、それにゼロ?」

「な、何のですか?」

「あの世に旅立つ準備です」

「イヤー！」

叫び声と共に大の男一人が畠を舞う。
だから嫌だつて言つたんだよー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7003d/>

なるようになれ*ミラクル*

2010年10月11日17時04分発行